

# ネズミがかじったモモの種

## モモとネズミと竪穴建物の廃絶

洞 口 正 史

(公財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- |             |                    |
|-------------|--------------------|
| 1 上ノ平Ⅰ遺跡とモモ | 4 竪穴建物と食痕モモ核       |
| 2 モモと出土遺跡   | 5 モモとネズミと竪穴建物の廃絶過程 |
| 3 モモ核と食痕    |                    |

### —— 要 旨 ——

モモは花の観賞や果実の食用、種子・子葉等の薬用利用から祭祀に当たっての供物、呪具等々、様々な場面で人に利用されてきた。モモ核は堅く、大きいこともあって、縄文時代以来多くの出土例がある。本県でも各時代に亘って88遺跡255地点もの出土例がある。長野原町上ノ平Ⅰ遺跡でも焼失した竪穴建物から炭化モモ核が出土したが、その多くにネズミによる食痕が残されていた。竪穴建物の住人がモモを利用していたことが示されるとともに、竪穴建物が放棄されてから焼却されるまでに、ネズミがモモを食べることのできる時間があったことがわかる。こうした時間差は長野県大師遺跡でも把握されており、生業を水田農耕のみに依らない新開集落特有の事象ではないかとの見通しを示した。

#### キーワード

対象時代 縄文時代から平安時代  
対象地域 群馬県・長野県・全国  
研究対象 モモ 竪穴建物 集落

遺跡の発掘調査中にモモのタネ(核)が見つかることは、それほど珍しいことではない。イネやムギなどの穀物やマメよりずっと粒が大きいし、現代の私たちにもなじみのあるタネなので、発掘作業員さんがめざとく見つけてくれることも少なくない。以前集成した県内遺跡の種実出土例<sup>(1)</sup>にあっても、モモ核はオニグルミやイネとともに他を圧倒的する出土地点数を示す。

昨年度筆者が整理作業を行った長野原町上ノ平Ⅰ遺跡<sup>(2)</sup>でも、平安時代の竪穴建物から、炭化したモモ核がいくつも見つかった。それだけであれば特別なことではないのだが、この遺跡で出土したモモ核はちょっと変わった特徴を持っていた。その多くが、ネズミにかじられていたのである。

## 1 上ノ平Ⅰ遺跡とモモ

上ノ平Ⅰ遺跡については、本紀要32号<sup>(3)</sup>でも紹介しているので、ごく簡単にふりかえりつつモモ核の産状を見る。

上ノ平Ⅰ遺跡は群馬県の北部、吾妻郡長野原町大字川原畑字上ノ平にある。標高584mから598mにかけての、吾妻川に面する南向き傾斜地に立地する、縄文時代と平安時代を中心とする遺跡である。縄文時代竪穴建物24棟、縄文時代晩期から弥生時代中期前半にかけての土器、9世紀から10世紀にかけての竪穴建物26棟と、陥穴と考えられる多数の土坑などが認められている。ハッ場ダム関連でされた遺跡の中では、比較的多くの竪穴建物で構成される平安時代集落である。遺跡内には湧水があるため、生活用水に事欠くことはなかったと思われるが、直近地には水田耕地は求められない。竪穴建物内土壌の水洗選別結果では、アワ、ムギ類が多く検出され、イネはわずかししか認められない。

表3に掲げたが、1号住居から3点、4号住居から1点、8号住居から2点、9号住居から1点、13号住居から10点、22号住居から1点、23号住居からは59点、30号住居から2点、48号住居から4点のモモ核出土が記録されている。さらに13号住居と23号住居では竪穴建物内の埋没土壌の一部を水洗選別しており、13号住居で6点(核1・核片5)、23号住居で核片1点が得られている。なお、48号住居出土とされた4点は上位に重複する23号住居に帰属すべきものと判断したため、この遺跡では計7棟の竪穴建物から90点のモモ核・核片が出土したことになる。

これらのモモ核はすべて炭化している。形態的には金原<sup>(4)</sup>のB類、E類に属すと思われる先端のとがった、やや小型のものが多く、A類ないしD類に近い丸みを持ったものが若干量ある程度で、形状のばらつきは比較的小さい。計測可能な個体の平均では、長さ2.3cm、幅1.7cm、厚さ1.3cmほどと、かなり小型の核である。

永井・柴本<sup>(5)</sup>によれば、長野県下伊那郡大鹿村の野生桃は形状から4系統に大別できるといい、これと対照すると上ノ平Ⅰ遺跡で出土したモモ核は一番小さなD系統に近い。この核を伴う果実は、長3.13cm、幅3.16cm、厚さ3.10cmで、重量は17.9gとのことである。果肉はごく薄く、生食や塩漬けというより、種子の薬用利用を考えたい大きさである。

特にモモ核を多く出土した13号住居、23号住居について詳述する。13号住居は南北5m、東西4.8mのほぼ方形の竪穴建物で、東壁南端近くにカマドを持つ。羽釜、大原2号窯式期の灰釉陶器片が出土しており、10世紀前半にあてられる。焼失建物で、炭化材が放射状に折り重なる状態で見つかり、炭化材の上に焼土が乗ることなどから、焼失時には建物が形状を留めていたものと思われるが、柱材はない。モモ核は最下位の炭化材とともに見つかっていて、残りの良い北西半に散在する。平面的な原位置を追うことはできないが、埋没土上位からの混入は考えにくい。10点の炭化モモ核が出土しているが、完形をとどめるものは1点しかない。小片、1/4片、1/2片の3点を除く7点に食痕がある。

23号住居は東西6.9m、南北6.8mと比較的大きく、ほぼ方形の平面形を呈する。北面では0.85mほどの壁高があるが南面で0.15mほどしかない。土師器甕、墨書のある物を含む須恵器坏碗類、鉄製刀子などがあるほか、覆土上層からではあるが貞観永宝(初鑄870年)が出土して注目された。9世紀後半に当てられる。焼失建物で、カマドから北西壁にかけての床面上に多くの焼土と住居の建築材と思われる炭化材が折り重なるように出土した。

モモ核は炭化材平面図の1面目にはなく、2面目に集中して掲載され、使用面平面図にも記録がある。埋没土の堆積状況と直接対比することはできないが、出土標高を見ても他の遺物よりは相対的に下位にあって床面に近い。土層断面図においても特別な攪乱痕跡は記録されていない。埋没土上位からの混入は考えにくい。すべて建築材と共に炭化したものと考えて良い。平面的な位置を見ると、建物北半の比較的広範囲に点在するが、北壁中央付近に29点、建物中央北寄りに9点がまとまる。また、23号住居直下に重複して48号住居があって、ここからもモモ核・核片4点の出土が記録されているが、本来23号住居にあったものが土壌攪乱によって下位の48号住居覆土に移動したものと判断した。出土モモ核63点中52点に食痕がある。

## 2 モモと出土遺跡

モモは中国原産で、日本にもともとあった植物ではない。バラ科モモ属で、春にきれいな花を咲かせる。アンズ、ウメやサクラと近縁な落葉中高木である。

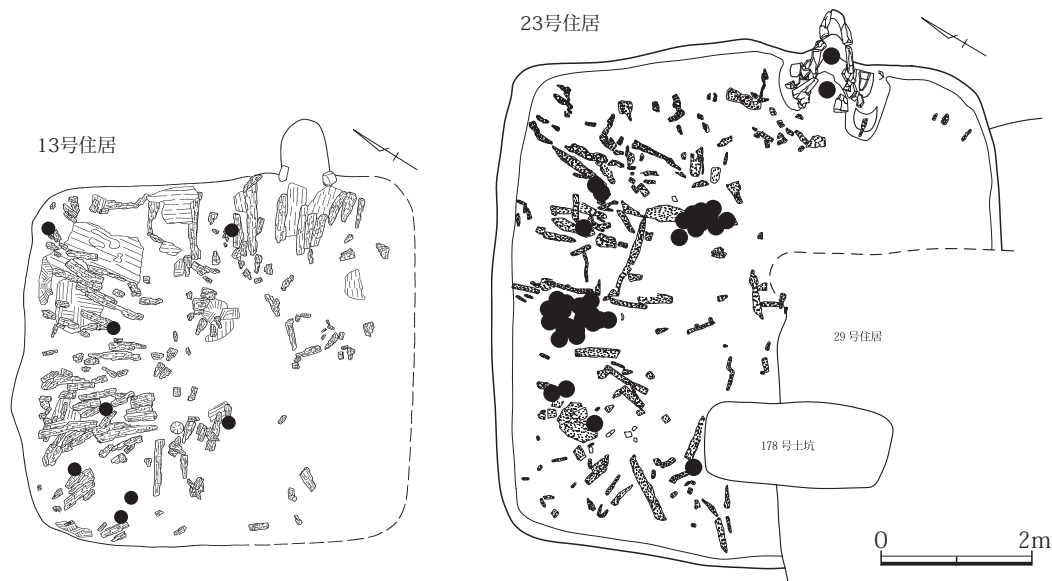


図1 上ノ平遺跡13号住居・23号住居のモモ核出土位置 1/100

春の苑 紅にほふ桃の花 下照る道に 出で立つ少女  
 大伴家持 (巻19・4132)  
 という万葉集所収の美しい、絵画的な歌が有名だが、桃始笑・桃始華として啓蛰の七十二候に数えられるように、春早く花を開くこともあって、花木として意識されていた。

果実はもちろん食用となる。といっても現在私たちが口にするのは明治以後に輸入された水蜜桃系の品種を導入して改良されたものであって、それ以前のモモは現代のモモに比べるとかなり小さく、固く、甘みもさほど強いものではなかったようだ。「在来桃」「野生桃」とされるもので、毛桃系と油桃系、それぞれいくつかの系統があるが、生食に向くものは少ない<sup>(5)</sup>。モモ果実の食べ方についての古い事例を知らないのだが、菅江真澄は天明5(1785)年に岩手県二戸郡一戸町小鳥谷あたりの民家に宿を頼み、飢饉のさなか食糧の乏しい折に、粟の飯と桃の塩漬けを食べている<sup>(6)</sup>。生食もなかったわけではないだろうが、こうした梅と同じような利用法が一般的だったのではなかろうか。

核内の種子・子葉は桃仁として古くから薬効が知られ、下腹部の満痛、腹部の血液の停滞、月経不順などに応用される<sup>(7)</sup>。さらに花や蕾は「白桃花」として、また葉は皮膚病や美容の民間薬として用いられる。『延喜式』巻三十六の典薬寮諸國進年料雑薬の条によれば、全国の33カ国が桃仁の貢進を行っており、平安時代には各地で桃栽培、桃仁の生産が行われていたことが窺える。

さらにモモは様々な神話、伝説にも登場する。伊弉諾が黄泉比良坂にあった桃の木から実を三つ取って投げ、八雷神に添えられた千五百の黄泉軍を撃退したという古事記上巻の記事が印象的である。西王母の蟠桃園しかり、

桃太郎もまたしかり。モモには呪力がある。

このように、モモは実用、非実用問わず、様々な価値を持つ。人とのつながりも多様であっただろうことが、モモ核を出土する遺構の状況からもうかがえる。

長崎県伊木力遺跡<sup>(8)</sup>で縄文時代前期にまで遡るモモ核が出土しているのをはじめ、縄文時代出土例も知られている<sup>(9)</sup>が、出土例が急増するのは弥生時代の特には後期以後である。このころからは材も見つかっていて、本格的に栽培が始まったことがうかがわれる。出土モモ核の形態分類や系統の追求なども古くから行われているが、調査例の拡大・深化に伴って、おそらくは渡来時期や経路、国内での栽培状況を反映したものであろう複雑さがわかるようになり、現在では単純に核の形状から品種や時代観について述べることはできなくなっている。

国立歴史民俗博物館の「日本の遺跡出土大型植物遺体データベース」<sup>(10)</sup>から「モモ」「モモ?」「モモ(コダイモモ)」「ヒメコダイモモ」「ノモモ」「モモ近似」「ウメまたはモモ」を含む)を抽出すると、852遺跡、1206件にも及ぶデータが得られる。沖縄県を除く各都道府県にあり、時代も縄文時代前期から近代・現代に至る。この中には群馬県分として既に39遺跡50件が含まれているが、地の利を生かして本県の出土例をやや詳しく見てゆこう。

群馬県内のモモ核出土遺跡の時代別、遺構種別傾向を表1に示した。表2の88遺跡255地点をまとめたものである。出土種実資料の常として、産状の検討・評価が慎重になさなくてはならないこと、またモモ核が出土した場合においても、これがすべて遺物として認識・確認され、報告されているわけではないこともあって、数を挙げるのがさほど意味を持つわけではない。報文に

	モモ核		食痕核	
	遺跡	地点	遺跡	地点
弥生	5	10	1	2
古墳	42	91	11	12
古代	33	66	6	12
中世	12	35	2	2
近世	10	40	2	5
近代以後	3	3		
不明・その他	9	10	1	1

表 1 県内モモ核出土遺跡の傾向

従う限りにおいてという条件付きであるが、時代別では弥生10、古墳91、古代66、中世35、近世40、近代以後3、不明10地点、遺構種別では住居(竪穴建物)76、溝46、井戸35、包含層30、河道18、土坑14、建物12、水田・畑・道12、その他墓、不明など12地点でモモ核が出土している。

最もモモ核の出土例が多い遺構種が竪穴建物である。時代別に見ると弥生時代3、古墳時代40、奈良・平安時代33という時代分布で、弥生時代例は少ないものの以後各時代の竪穴建物から出土していることがわかる。数的データの少ない報告も多いのだが、1棟で多数のモモを出土したという竪穴建物は少ない。万蔵寺廻遺跡11号住居や江木下大日遺跡40号住居のように、出土したモモ核の破片数は多くとも、復元される完形個体が1～2個程度にしかならない例もある。産状評価ができない報告も多いが、自生している植物ではないので、果実食か種子利用かはわからないが、モモが広く利用されていたことを示すものとみて良い。

河道や溝などでは、廃棄されたと見られるものの他、近隣に桃園があってそこでの落果が集積したものかと思われる例もある。井戸からの出土では、決定的な証拠は得がたいものの、祭祀的な行動の結果としてモモ核が残された可能性が考慮される。古墳からの出土例にはやはり供物的な性格を考えざるをえない。

本題からは外れた特異例であるが、中世の火葬遺構である下佐野長者屋敷遺跡4号土坑から、炭化した完形のモモ核28個が出土している。見つかったモモ核がすべて完形で、かつ、このうちの1個には果柄がつき、5個には外果皮、中果皮が付着している。すなわち核の状態で炭化したのではなくて、果実の状態で炭化したのだと言うことになる。さらに、材の樹種同定でもモモが見つかっていて、火葬に際して、実の付いた状態のモモの枝を、タケと一緒に燃やした、という状態が想定されることになる。これらのモモには直接的な食品としての性格は乏しいようだ。

### 3 モモ核と食痕

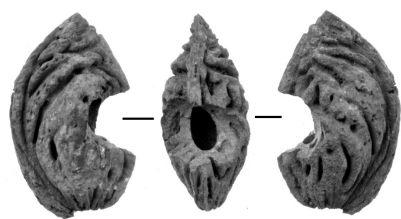
	モモ核		食痕核	
	遺跡	地点	遺跡	地点
竪穴建物	31	76	1	7
溝	21	46	7	9
井戸	18	35	2	2
包含層	16	30	5	5
河道	13	18	4	4
土坑	13	14	1	1
建物	5	12	1	2
水田	5	8	2	2
畑・道	4	4		
墓	3	4		
古墳	2	2	2	2
不明・その他	5	6		

上ノ平Ⅰ遺跡23号住居では63点中52点、13号住居では10点中7点に側面に円形の穿孔がある。また、10号住居7、1号住居2、4号、8号、9号、30号住居各1点に同様の穿孔がある。おおよそは縫合線をまたいだ片側面に、外側が大きく内側に行くに従って狭くなる円錐台状の穿孔が認められるもので、時として腹側面や縫合面の両側が穿孔される場合もある。

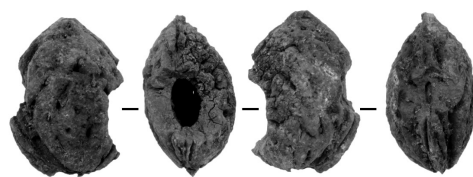
穿孔を持つモモ核については、薬用の種子・子葉を取り出そうとした加工痕跡と考えられたり、両側に穿孔がある場合には数珠状に連ねるもの、片側穿孔の場合には鹿笛などとも考えられたりしたことがある<sup>(9)</sup>。種子・子葉を取り出すのであれば打撃痕のあるものをこれに当てるのが妥当であろうし、上ノ平Ⅰ遺跡における片面穿孔の多さは数珠説を否定する。長野県屋代遺跡群のモモ核には笛ではないかとされるものがあるが<sup>(11)</sup>、これは縫合線に沿ってこれを刃物で削り取ったもので、上ノ平Ⅰ遺跡に見られる穿孔とは形状がかなり異なる。

こうした円形穿孔は人工ではなく、ネズミによる食痕であることが知られている。縄文時代の遺跡から出土するオニグルミ核に同様の痕跡が残されているのはよく目にするとところである。モモはオニグルミより内果皮が厚く、歯牙による切削痕跡が目立つために、人が工具を使って穿孔したかのように捉えられるのだろう。オニグルミ核に見られる食痕は縫合線の両側を嚙っているものが多く、アカネズミによるものとされる。ヒメネズミにはオニグルミは大きすぎるらしい。上ノ平Ⅰ遺跡のモモ核は両側に食痕が残ることは少なく、片面のみである場合が多い。両面穿孔として写真を掲載した60049や60094も、種子に達する穿孔は片面のみである。また、60063は内部に種子が残ったままであって、ネズミは所期の目的を達していない。同様に種子が残ったままの食痕核は1号住居、8号住居、13号住居でも確認しているほか、60055や60074のように種子・子葉を取り出すには小さすぎるとされる穿孔痕跡しかないものもある。報文ではこうした特徴を、モモ核がオニグルミ核より小さいためと考え、食害獣をアカネズミとしたが、あるいは体の小さいヒメネズミによる食痕であるためかもしれな

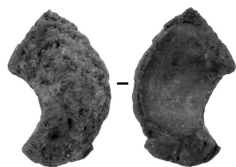




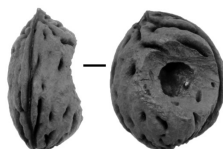
縫合面片側食痕 60036



縫合面両側食痕 60049



縫合面片側食痕の半割片 60052



側面食痕 60046



60032

60033

60035



60037



60045



60047



60050



60051



60054



60055



60056



60057



60058



60059



60060



60063



60064



60065



60066



60068



60069



60070



60071



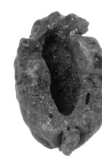
60072



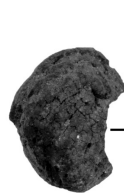
60073



60074



60075



60076



60079



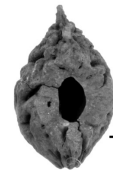
60083



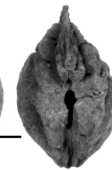
60085



60086



60094



60097

PL1. 上ノ平Ⅱ遺跡 23 号住居出土モモ核の食痕

20mm

い。

食害獣と考えられるアカネズミ、ヒメネズミはともに齧歯目ネズミ科アカネズミ属に属する小型のネズミで北海道から九州までの広く山野に生息している。アカネズミは頭胴長80～140mm、尾長70～130mm、体重20～60g、ヒメネズミは小さく頭胴長65～100mm、尾長70～110mm、体重10～20g。ともに低地から高山域までの林縁や明るい林床の地上に生活圏を持ち、堅果類など木の実や根茎、昆虫などを食べる。アカネズミは地上生活者なのに対し、ヒメネズミは初夏から秋にかけて半樹上生活をおくる。また、ネズミ類は一般に素早く食べられる小さな種子などはその場で食べるが、採食時間がかかる大きな堅果類などは、その場で食べず運んで貯食し、あるいは安全な採食場所まで運んでから食べることが知られている。モモ核の食害者であるネズミは同時に運搬者でもある<sup>(12)</sup>。

表2中には、こうしたネズミによる食痕の付いたモモ核出土例が23遺跡35遺構ある。

モモ核出土遺跡数に対する食痕核出土遺跡数の比を採ると、溝、包含層、河道では30%以上、水田では40%を示す。特徴的なのは二之宮宮下東遺跡3区16層で、谷地中央部で厚さ約50cm、平均幅11mにわたって広がるHr-FA上の遺物包含層である。6世紀中頃から7世紀初め頃の土器とともに二千数百点に上る木質遺物が出土した。種実も多種多様であるが、モモは核、核片併せると1300点を越える。「食用にした後に廃棄したか、モモ畑の可能性が高い。」とされるほどである。この中の156点に食痕がある。二之宮千足遺跡6区谷地砂層ではHr-FA上面の砂層からイネ、モモ、メロン仲間、ヒョウタン仲間などが出土している。他に遺物はなく、詳細な時期決定はできないが、古墳時代に属する。モモ核・核片69が出土していてこのうち3点に食痕があるほか、スモモ核・核片174があって、そのうち32点に食痕がある。古墳時代首長居館として著名な三ツ寺Ⅰ遺跡の堀からも12点の食痕モモ核が出土している。山野に生息するネズミが、モモ畑から落果した、あるいは食用、祭祀用として使用された残渣としてのモモ核を移動させ、齧った核が河道や溝、低地などに落ち込むことは十分考え得るところで、これらが上位を占めることに疑問はない。古墳は悉皆的な集成ができていないが、人気の絶えた横穴式石室内にネズミが入り込むことは難しくはなかったであろう、著名な八幡観音塚古墳、綿貫観音山古墳が2基ともに食痕核を出土している。

井戸は、モモ核全体では18遺跡35遺構と竪穴建物、溝に次ぐ3位を占めていたのに対し、食痕核は2遺跡2遺構しかない。さらに、土坑は10遺跡、12遺構のうち二之宮千足遺跡3区2号竪穴出土の4点にしか食痕核がない。井戸内のモモ核はモモが埋設時の祭祀に用いられ

た事を示すものと考えられているが、ネズミがかじった桃をわざわざ祭祀に使うとは思えないし、埋められたモモ核を相当の深さのある土中に求め、その場で食するというのはネズミの生態とも符合しない。少数の出土例は埋設に用いた土中に食痕つきのモモ核が混在していたものと考えた方が良さそうである。土坑からの食痕つきモモ核が少ないのも、ネズミが土中のモモ核を食べないという理由によると考えられる。これらが下位をしめるのも当然であろう。

#### 4 竪穴建物と食痕モモ核

モモ核全体の出土では遺跡数、遺構数ともに最上位を占めた竪穴建物だが、食痕核に限ると上ノ平Ⅰ遺跡の7棟のみである。

さらに群馬県外のモモ出土遺跡からも食痕の付いた核を出土した竪穴建物を抽出してみたが、これも少ない。

「モモ」をキーワードに全国遺跡報告総覧<sup>(13)</sup>から抽出した283遺跡の調査報告書中、食痕が報告されているものが37遺跡(13.07%)ある。群馬の155遺跡中23遺跡14.8%と大きく変わる比率ではない。しかし竪穴建物に限ると、長野県佐久市西一本柳遺跡H46住居(古墳時代後期)<sup>(14)</sup>、同市円正坊遺跡H8住居(5末・6初)<sup>(15)</sup>、山梨県都留市九鬼Ⅱ遺跡7号住居(平安時代)<sup>(16)</sup>、兵庫県佐用町上三河遺跡SHO1住居(弥生中期後半)<sup>(17)</sup>のわずか4例、「総覧」以外では、長野県南相木村大師遺跡<sup>(18)</sup>H-1号、H-3号住居(平安時代)から食痕核が出土しているのを知り得たにとどまる。

長野県佐久市西一本柳遺跡H46号住居址は弥生時代中期から中世に至る、佐久市内でも有数の遺跡の密集した古代集落中の1棟で7世紀代のものとされる。東西6m弱、南北5.3mほどの規模で、北壁にカマドを持つ。遺構の残存は必ずしも良くなく、遺構記載中にモモは現れないが、同定報告によるとモモ核は床面から出土したものである。同遺跡では弥生時代中期(同定報告では後期とあるが本文に従う)のH23号住居址からもモモ核1点が出土しているが、こちらには食痕がない。

同市円正坊遺跡の中心は古墳時代の集落であるが、弥生時代から古墳時代初頭の周溝墓、平安時代の集落などが調査されている。H8号住居址は南北4.52m、東西4.36mの規模で北壁にカマドを持つ。古墳時代中期末から後期初頭に位置づけられる。遺構記載中にモモは現れないが、同定報告によるとモモ核は床面から出土したものらしい。同遺跡では古墳時代後期のH3号住居址の床下からもモモ核が出土しているが、これには食痕がない。

山梨県九鬼Ⅱ遺跡は縄文時代、平安時代の集落遺跡で、平安時代の第2号住居から核2、第7号住居から核片1、C-8グリッドから核片1が出土している。同定報告に

は完形と思われるモモ核に円形食痕が付いたものの写真が掲載されているため、第2号住居出土核のうちの一つには食痕があったものと思われる。第2号住居は形状が捉えにくい1辺4mの隅丸方形を呈する9世紀中頃の竪穴建物で、同定報告によるとモモ核は北西角近くに築かれた石組みのカマド内部から単体で取り上げられたものである。

兵庫県佐用町上三河遺跡SHO1は弥生中期後半の直径10m前後の円形住居で、埋土から土器、石器、サヌカイトのチップ、炭化したイネ・オオムギ・オニグルミ・モモなどの種実類が出土している。「住居内で石器の製作が行われており、住居廃絶後も石器の製作現場、またはサヌカイト片の捨て場として利用された可能性が考えられる。」とされる。埋没土の上下両層から21点のモモ核片が出土している。食痕の記載はないが、巻頭図版4に掲載されたモモ核の写真には円形の食痕があるように見える。

長野県南相木村大師遺跡は、縄文時代、平安時代の集落遺跡で、南相木川と茂沢川の形成した段丘上、南向きに開けた平坦なテラス上に立地する。標高は1000mを越える。ハッ場地区の平安時代集落に似た環境下にある遺跡である。H-1号住居址は南北4.3m、東西3.3mの隅丸方形で、北壁に石組粘土カマドが築かれている。光ヶ丘1号窯式の灰釉陶器、土師器の坏・高台付坏・甕などが出土している。9世紀末から10世紀初頭に位置づけられる。焼失建物である。モモ(核)とモモ(子葉)各1点、核片1点が出土している。完形のモモの核と子葉には動物食痕がみられた。

H-3号住居址は南北3.2m、東西2.9mの隅丸方形で、東壁の中央よりやや南寄りにカマドが築かれている。光ヶ丘1号窯式および大原2号窯式の灰釉陶器、土師器の坏・高台付坏・甕などととも、緑釉陶器の皿が出土している。10世紀初頭に位置づけられる。モモ核1点と破片30点(完形個体換算5~6個)、モモ子葉完形5点と破片7点(完形個体換算数で1~2個)があり、モモの完形の子葉にはすべて動物食痕がみられた。このほか、H-4号住居址のカマドからも、モモ核片2点が出土している。

大師遺跡例は上ノ平Ⅰ遺跡とよく似た出土状況を示している。西一本柳遺跡は床面から、円正坊遺跡、九鬼Ⅱ遺跡はカマド内出土で、当該竪穴に伴う可能性があるが、混入の疑いも捨てられない。上三河遺跡例では覆土上位に及ぶ垂直分布があり、サヌカイトチップの評価では竪穴埋没後の廃棄も考えられていて、井戸や土坑と同様、埋没土中に混入したものである可能性が高い。

## 5 モモとネズミと竪穴建物の廃絶過程

余談に渡るが、マタタビでは通常の果実ではなく、変

形した虫こぶを薬効がある生薬「木天蓼」として珍重する。もしかしたら、種子・子葉がないとはいえ食痕のあるモモ核が、虫こぶと同様により強い薬効があるような扱いをされるのではないかと考えてもみたのだが、これだけ例が少ないと当たりそうもない。

翻つてもう一度上ノ平Ⅰ遺跡を見る。本稿のテーマに引き寄せてみると、標高600m前後は、アカネズミとヒメネズミが共に棲息する領域であり、また林地の中に開かれた集落周辺は林縁や明るい林床に生活圏を持つ彼らにとって良好な生活環境であっただろう。一方先に見たように、ネズミは臆病な動物なので、モモ核のように食べるのに手間のかかる食料はその場で食べずに貯食し、あるいは安全な採食場所まで運んでから食べるという。ネズミが、人の居住している竪穴建物内を貯食場所を選択するとは考えられない。夜間、竪穴建物の住人が寝静まった後に竪穴建物に潜り込んでも、クルミほどではないにせよ堅いモモ核を齧ればそれなりの音が出てしまう。何個ものモモ核を齧る間も、住人が目を覚まさないとは考えにくい。人が住んでいる竪穴建物は安全な採食場所ではなかったはずである。

人々が竪穴建物を放棄することによって、そこはネズミにとっての安全な採食場になった。さらに、モモ核が炭化する、すなわち建物に火が放たれたのは、ネズミがモモ核を(種子・子葉の残った核もあるので)ある程度食べ終わってからのこと、ということになる。

- ① 居住の開始→モモ核の竪穴内への持ち込み
- ② 竪穴建物の放棄=モモ核の放棄
- ③ ネズミの侵入→モモ核の食害
- ④ 竪穴建物の焼失=モモ核の炭化

というストーリーが描けることになる。ネズミが外部で採取したモモを放棄竪穴内に持ち込んで貯食した可能性もあるが、いずれにせよ竪穴の放棄とネズミによるモモ食害、モモ核の炭化それぞれの間には、ある程度の時間が必要になる。

一般的に竪穴建物の焼失に関しては①→④という、失火や自然災害、戦闘などに際しての放火など、建物使用中に起きた不時出火のストーリー、あるいは①→②→④という竪穴放棄時の焼却という二つのストーリーが読み取られる。前者はもちろん、後者においても②と④の間の時間差はなく、ネズミが活動する余地はない。多くの住居出土モモ核に食痕核がないのは、これを反映してのことであろう。

一方、上ノ平Ⅰ遺跡では、23号住居で炭化材の出土状況から「事前に竈を解体し、上屋を解体し、必要部材を取り外したのちに火をつけたものと思われる。」としていて、この点からも②と④の間に時間差を認めている。調査者は先に見た13号住居の炭化材出土状況との対比でこの時間差を求めているのだが、モモ核とネズミを介



在させると、13号住居でも同様に住居放棄と建物焼失の間に時間差が存在した可能性が高いものと考えられる。23号住居は9世紀後半、13号住居は10世紀後半のものであるから、特定時点の特異例にとどまるものとは考えられない。そうすると、他の5棟にも同様の状況が想定できるのである。

さらに長野県大師遺跡の2棟の竪穴建物でも同様に、壁際の堆積土形成後に「火が放たれ、燃やされた廃屋」であって「カマドは・・・住居廃絶時に取り壊された」とする土層観察所見が得られている。

今まで見てきたように、竪穴建物内にモモ核があるということは特に異とすることではない。また、モモ核にネズミの食痕があるということも特別なことではない。上ノ平Ⅰ遺跡、大師遺跡出土のモモ核にはその両者が同時に見られるという特異性があったわけだが、その原因は竪穴建物放棄と焼失の間の時間差にあったのである。

放棄・焼失間がどの程度の時間であったのか、今のところ知るすべはない。また、何故こうした時間差が生まれたのかも推しがたい。今のところ両遺跡の他に例が無いところから、この遺跡の特徴を抽出することで、推理の手がかりを得ることにしたい。

本紀要32号の拙稿で紹介したとおり、神谷は上ノ平Ⅰ遺跡出土を、この地域の平安時代集落が律令崩壊期以後の新たな開発を目的として、古代吾妻郡域の郡司・富豪層が主導し、郡内の郷戸を裂いて形成したものと考え、こうした集落の生業が単純に農耕生産のみによったものではないとの見通しを示した<sup>(19)</sup>。石田は更に進めて、この地域の平安時代の遺構として顕著な陥穴の存在と合わせて、皮革生産に関わる集落ではないかと想定している<sup>(20)</sup>。また、拙稿では炭化種実分析によりこの集落がアワ、ムギを主食としていて、水田およびイネに依った食生活ではなかったことを明らかにし、ムギ作や雑穀作に商品としてのコメ流通も含めた、新しい食料獲得システムの形成がこうした集落成立の背景にあるという見通しを示すと同時に、穀物調理の方法には革新が見られない点を疑問として残した。

大師遺跡についても、調査者は「本遺跡は居住地が山間地に拡大する頃の一端をみせる好例と言えよう。それはあるいは、山間地における稲作のみでない多様な生業展開がなされつつあったことを示しているのかもしれない。」と述べられている<sup>(18)</sup>。

上ノ平Ⅰ遺跡・大師遺跡はともに、伝統的農耕集落の拡大によって成立したのではない。新開の、水田農耕に依らない集落が、地域支配層の発意によって作られたものであろうという点が、何よりの特徴としてあげられる。成立過程を反転して廃絶の過程を想定すれば、やはり集落成員の自発によらない、地域支配層の意図による廃絶というストーリーを描くことも可能である。

竪穴の住人は、おそらく最も重要な竪穴廃棄儀礼であったカマドの破壊を行っている。しかし直ちに竪穴建物の焼却を行うことはなかった。

理由はわからない。中間にさほど長いものではない別の行動を挟んでから焼却を行ったのかもしれないし、上ノ平Ⅰ遺跡では全体としての集落継続期間が短い中で、何回かの竪穴放棄、建設が繰り返されていることから見て、遠くない時期に再びここに戻るという意思表示として焼却せずに彼の地を離れた、離れさせたのかもしれない。

水田農耕に依らない集落であること、集落成員の自発によらない集落であること、ここに回答の鍵があるように思うのだが、いかがであろうか。

本稿は平成28年度当事業団自主研究活動事業「水田地域・非水田地域における平安時代主食穀物及び土器使用痕の比較研究」および平成29年度同事業「平安時代竪穴建物から出土する食痕のあるモモ核についての基礎的研究」で助成を受けた成果の一部である。また、本稿作成に当たっては次の方々にご教示、ご援助をいただいた。記してお礼申し上げる。

南相木村教育委員会 姉崎智子 佐々木由香

#### 注

- (1) 洞口正史 2007「群馬県埋蔵文化財調査事業団種実調査遺跡集成」『研究紀要』25 群馬県埋蔵文化財調査事業団p.139-154  
洞口正史2008「群馬県種実調査遺跡集成」『研究紀要』26 群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.221-240
- (2) 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008『上ノ平Ⅰ遺跡(1)』群馬県埋蔵文化財調査事業団 2017『上ノ平Ⅰ遺跡(2)』
- (3) 洞口正史(編) 2014「平安時代主食穀物についての素描2」『研究紀要』32 群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.53-72
- (4) 金原正明1996「古代モモの形態と品種」『月刊考古学ジャーナル409』ニューサイエンス社 p.15-19
- (5) 永井喬・柴本一好 1952「伊那地方の野生桃について(第1報)」『園芸学会雑誌』21(2) 園芸学会 p.104-106
- (6) 菅江真澄著/宮本常一・内田武志編 2003『菅江真澄遊覧記1』平凡社
- (7) 富山大学和漢医薬学総合研究所伝統医薬データベース 桃仁 <http://dentomed.toyama-wakan.net/> (2017年10月23日閲覧)
- (8) 多良見町教育委員会・同志社大学考古学研究室 1990『伊木力遺跡』
- (9) 南 健太郎 2016「縄文のモモ、弥生のモモ」(『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター報』55)では縄文モモの主な出土遺跡として16遺跡が挙げられている。なお、津島岡大遺跡第6次調査で出土した縄文時代後期前半のモモ核が紹介されており、これにも食痕がある。
- (10) 「日本の遺跡出土大型植物遺体データベース」 [https://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/login.pl?p=param/issi/db\\_param](https://www.rekihaku.ac.jp/up/cgi/login.pl?p=param/issi/db_param) (2017年10月23日閲覧)ここでは29遺跡が縄文時代のモモ出土遺跡として数えられる。
- (11) 辻誠一郎 2003「更埴産古代ヒョウタン遺体」『国立歴史民俗博物館研究報告』108 国立歴史民俗博物館 p.119-145
- (12) 関島恒夫 2008「種間競争と共存—アカネズミとヒメネズミ」『日本の哺乳類学1』東京大学出版会
- (13) 全国遺跡報告総覧 <http://sitereports.nabunken.go.jp/> (2017年10月23日閲覧)
- (14) 佐久市教育委員会 2005『一本柳遺跡群 西一本柳遺跡X』



- 株式会社古環境研究所「西一本柳遺跡Xにおける種実同定」同書 p.151
- (15) 長野県佐久市教育委員会 2002『枇杷坂遺跡群円正坊遺跡Ⅳ』パリーノ・サーヴェイ株式会社「円正坊遺跡Ⅳの自然科学分析」同書 p.177-185
- (16) 山梨県教育委員会 1996『九鬼Ⅱ遺跡』パリーノ・サーヴェイ株式会社「九鬼Ⅱ遺跡出土の自然化学分析」同書 p.76-79
- (17) 兵庫県教育委員会 2009『佐用町上三河遺跡』株式会社古環境研究所「上三河遺跡における自然科学分析」同書 p.60-69
- (18) 南相木村教育委員会 2013『大師遺跡 平安時代編』佐々木由香・パンダリ スタルシャン「大師遺跡の竪穴住居跡から出土した炭化種実」同書 p.36-42
- (19) 神谷佳明 2008「上ノ平Ⅰ遺跡出土の灰釉陶器」『上ノ平Ⅰ遺跡(Ⅰ)』群馬県埋蔵文化財調査事業団 p.142-145

- (20) 石田真 2008「群馬県北西部における古代の陥し穴の意義」『ぐんま史料研究』25 群馬県立文書館 p.1-39

#### 参考文献

- ・清水水卓二 1963「古代日本の住居跡から出土する桃核について」榎原考古学研究所編『近畿古文化論攷』p.559-568
- ・太田三喜 1986「古代遺跡出土のモモ核について」『考古学と自然科学』第19号 日本文化財科学会 p.85-98
- ・桃崎祐輔 1989「神明原・本宮川遺跡出土の種実について」『大谷川Ⅳ(遺物・考察編)』静岡県埋蔵文化財調査研究所 p.303-308
- ・桃崎祐輔 1990「桃呪術の比較民俗学(Ⅰ):日本の事例を中心として」『比較民俗研究Ⅱ』筑波大学比較民俗研究会 p.41-88
- ・新津健 1999「遺跡から出土するモモ核について—山梨県内の事例から—」『山梨考古学論集Ⅳ』山梨県考古学協会 p.361-374
- ・有岡利幸 2012『桃』法政大学出版局

遺跡名	地点名	部位・数量等	食痕	時代	文献
入野遺跡	第5号住居跡			古墳	吉井町教委 1962『入野遺跡』
	第6号住居跡			古墳	
	第9号住居跡			古墳	
五反田遺跡	J-12区Ⅱ号土坑			古代	太田市教委 1978『群馬県太田市五反田、諏訪下遺跡』
間之原遺跡	1区8号竪穴住居	核片1		古代	太田市教委 1981『大塚、間之原遺跡確認調査の概要第2次調査(白金、榎戸、大塚、高原地区)』
	1区10号竪穴住居	核片2		古代	
	1区14号竪穴住居	核片8		古代	
	1区1号竪穴状遺構	4		古代	
	3区81号竪穴住居	核2		古墳	
吹屋遺跡	8号井戸			中世	群埋文1982『元島名B・吹屋遺跡』
日高遺跡	164号溝	13		弥生	群埋文1982『日高遺跡』/高崎市教委2004『『史跡日高遺跡平成12～14年度内容確認調査(第7～9次調査)概報』
	170・171・172号溝	核・核片2		弥生	
	南区171号溝	核片9		弥生	
	北区156号溝	1		古代	
	南区154号溝	4		古代	
	SD200			古代	
重殿遺跡	北区154号溝	核1		古代	新田町教委 1984『重殿遺跡』
	B-1号井戸				
伊勢ノ木遺跡	B-1号溝		1か?		板倉町教委1985『伊勢ノ木・小保呂遺跡発掘調査報告書』
	13号住居址			古墳	
	45号住居址			古墳	
	46号住居址			古墳	
下村北・砂内遺跡	6号住居址			古墳	高崎市教委1985『矢中遺跡群Ⅸ』
天神久保遺跡	1号井戸			中世	
新保遺跡	凹地01の北側の集石中または1号住居			古代	高崎市 1985『宿大類遺跡群(5) 天神久保遺跡』
	C溝	6		弥生	
	D溝	25	1以上	弥生	
	2B溝	39	1以上	弥生	
	A溝	6		古墳	
	B溝	30		古墳	
	31号井戸	1以上		古代	
	4号井戸	2以上		古代	
村西・増殿遺跡	8号井戸	1		中世	高崎市教委1986『矢島町村西、増殿遺跡』
寺田遺跡	大溝			古代	前橋市教委1987『寺田遺跡』
柳久保遺跡	第16地点B区	34	2	古代	前橋市教委1987『柳久保遺跡群Ⅳ』
三ツ寺Ⅰ遺跡	濠	核168	12	古墳	群埋文1988『三ツ寺Ⅰ遺跡』
蛭沢遺跡	1号井戸			古墳	群埋文1988『新保遺跡Ⅲ・蛭沢遺跡』
	2号井戸			古墳	
専光寺付近遺跡	131号住居			古代	大泉町教委 1989『専光寺付近遺跡昭和63年度』
高崎城遺跡	坪ノ枳形堀覆土			1 近世	高崎市教委 1990『高崎城遺跡Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ 坪ノ枳形遺跡、坪ノ枳形及び三ノ丸遺跡、東門及び三ノ丸遺跡』
国分境遺跡	旧河道	核・核片	あり	古墳	群埋文1990『国分境遺跡』
新保田中村前遺跡	2号河川跡	核		弥生	群埋文1990・1992『新保田中村前遺跡Ⅰ・Ⅱ』
	137号住居	1		古墳	
	1号河川跡			古墳	

表2-1 群馬県内モモ出土遺跡1

遺跡名	地点名	部位・数量等	食痕	時代	文献
荒砥北三木堂遺跡	56号住居	炭化核片 1		古墳	群埋文1991『荒砥北三木堂遺跡Ⅰ』
	29号住居埋土	炭化核片 2		古墳	
	1号土坑	炭化核2・核片2		古墳	
三室間ノ谷遺跡	木道遺構	核26		古墳	群埋文1991『三室間ノ谷遺跡』
	橋状遺構	核多数		古墳	
二之宮千足遺跡	1区73号溝	核・核片25		古墳	群埋文1992『二之宮千足遺跡』
	3区11号井戸	核片 1		古代	
	3区1号竪穴	核 1		古代	
	3区2号竪穴	核・核片 4	1	古代	
	3区58号溝	核・核片 5		古墳	
	3区C下水田	核・核片 2		古墳	
	3区FA上第2水田	核 1		古墳	
	5区C上水田	核・核片37	2	古墳	
	6区谷地1号溝	核片 2		古墳	
八幡観音塚古墳	6区谷地砂層	核・核片68	3	古代	高崎市教委1992『観音塚古墳調査報告書』
	観音塚古墳石室内		1以上	古墳	
下川田平井遺跡	11号住居跡	炭化核片 1		弥生	群埋文1993『下川田下原・下川田平井遺跡』
	4号住居跡	核 1		古代	
	14号住居跡	炭化核片 1		古代	
	五反田地区As-B層下水田跡	核・核片13		古代	
上戸塚正上寺遺跡	1区2面7号溝	核、核片 7		古墳	群埋文1993『上戸塚正上寺遺跡』
	1区2面2号溝	核 6		古墳	
萩原団地遺跡	FA降下面		1以上	古墳	高崎市教委、萩原団地遺跡調査会 1993『萩原団地遺跡』
高崎城三ノ丸遺跡	二ノ丸堀南			近世	高崎市教委 1994『高崎城ⅧⅨ、高崎城三ノ丸遺跡』
高林梁場遺跡	不明			古墳	太田市教委 1994『市内遺跡X』
	不明			古代	
中筋遺跡	8次調査区1号住居			古代	渋川市教委1994『市内遺跡Ⅶ』
二之宮宮下東遺跡	3区16層	1365	156	古墳	群埋文1994『二之宮宮下東遺跡』
	3区13～15層	不明		古代	
白倉下原遺跡	A区33号住居	炭化核 1		古墳	群埋文1994・1997『白倉下原・天引向原遺跡Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ』
	A区34号住居	炭化核 1		古墳	
	A区85号住居	炭化核 4		古墳	
	A区112号住居	炭化核 1		古墳	
	B区73号住居	炭化核 2		古墳	
	C区4号住居	炭化核 1		古墳	
	C区42号住居	炭化核 1		古墳	
	C区57号住居掘り方	炭化核 1		古代	
	B区136号土坑覆土	炭化核 1		古代	
中高瀬観音山遺跡	B区21号土坑覆土	炭化核 1		古代	群埋文1995『中高瀬観音山遺跡』
	152号	炭化核片 1		弥生	
	113号	炭化核片 2		弥生	
	250号下層	炭化核片 1		古墳	
	KJ15号C-1	炭化核片 2		古代	
元総社寺田遺跡	Hr-FA下遺物包含層	核・核片28		古墳	群埋文1996『元総社寺田遺跡Ⅲ』
	2号河道	核 5		古代	
	河道	核69		古代	
	5号河道	核片 8		古代	
天引狐崎遺跡	Ⅵ区Ⅲa～Ⅲb層中	核・核片17		古代	群埋文1996『天引狐崎遺跡Ⅱ』
田ノ保遺跡	旧河川	核 1		古墳	北橘村教委1996『『北町遺跡・田ノ保遺跡』』
北町遺跡	C区2号水路泥流下			古墳	北橘村教委1996『北町遺跡・田ノ保遺跡』
	C区H-5			古墳	
	C区H-7住 一号炉			古墳	
	C区H-12(下層)			古墳	
	C区H-8(下層)			古墳	
	B区H-23(貼床)			古墳	
五料野ケ久保遺跡	C区H-17住(上層)			古墳	群馬県教委・松井田町遺跡調査会 1997『松井田町内関越自動車道(上越線)関連遺跡 自然科学分析編』
	包含層				
公田東遺跡	館跡橋部分			中世	群埋文1997『棚島川端・公田東・公田池尻』
中屋敷・中村田遺跡	I地区4号溝	核		古代	新田町教委1997『中屋敷、中村田遺跡 成果と課題、写真図版編』
	I地区6号溝	核		古代	
	V地区2号溝			中世	

表2-2 群馬県内モモ出土遺跡2

遺跡名	地点名	部位・数量等	食痕	時代	文献
天引向原遺跡	F区B軽石下 66号住居床直	炭化核・核片29 炭化核・核片2	1以上	古墳 古代	群埋文1997『白倉下原天引向原 遺跡Ⅳ・Ⅴ』
久々戸遺跡	2号掘立柱建物 K23号畑	核片4 核片2		近世 近世	群埋文1998『長野原久々戸遺跡』
東平井中道B遺跡	I－1号井戸		1以上	中世	藤岡市教委・山武考古学研究所 1998『F28a東平井中道B遺跡、F28b薬師遺跡』
浜川長町遺跡	1号住居	核		古墳	群埋文1998『浜川遺跡群』
薬師遺跡	I－1号井戸			中世	藤岡市教委・山武考古学研究所 1998『F28a東平井中道B遺跡、F28b薬師遺跡』
小八木志志貝戸遺跡	6区試掘			近世	群埋文1999『小八木志志貝戸遺跡群1』
下植木耆町田遺跡	1区2号井戸	核1		中世	群埋文1999『下植木耆町田遺跡』
	1区8号井戸	核1		中世	
	1区1号堀	核11		中世	
唐桶田遺跡	8号住居址			古墳	太田市教委 1999『唐桶田遺跡発掘調査報告書』
	3号溝		あり	古墳	
梅の木遺跡	1号河道				新田町教委 1999『松ノ木、梅ノ木、振矢遺跡 平成2年度』
綿貫観音山古墳	綿貫観音山古墳	核1	1	古墳	群埋文1999『綿貫観音山古墳Ⅱ』
乗附五百山遺跡	2号住居跡			古墳	高崎市教委 2000『乗附五百山遺跡』
中里見中川遺跡	5区平安溝	核2		古代	群埋文2000『中里見遺跡群』
	4区2号土坑	核1			
石墨遺跡（沼田チェーンベース地点）	38号住居	炭化核・片4		古代	群埋文2001『石墨遺跡』
	27号住居	炭化核片1		古代	
	37号住居	炭化核片2		古代	
横手湯田遺跡	B区1号流路黒色粘質土下	核1		古墳	群埋文2002『横手南川端遺跡・横手湯田遺跡』
	B区1号流路	核10		古墳	
	L区12号井戸	核1		近世	
下淵名・高田遺跡	5号井戸			中世	境町教委・群馬県企業局 2002『下淵名、高田遺跡』
	11号井戸		1か	中世	
	18号井戸			中世	
	23号井戸			中世	
	24号井戸			中世	
	31号井戸			中世	
	13号溝			近・現代	
	21号溝	93	複数	中世	
	32号溝			中世	
上滝榎町北遺跡	7号トレンチ				群埋文2002『上滝榎町北遺跡・上滝Ⅱ遺跡』
	264号溝	核1		近世	
	339号溝	核1		近世	
	11号井戸	核・核片3			
長野原一本松遺跡	2・3区土層断面資料1	核1	1以上	古代	群埋文2002『長野原一本松遺跡(1)』
波志江中屋敷東遺跡	C区4面水田	核12		古墳	群埋文2002『波志江中屋敷東遺跡』
	C区ベルト北側4面水田	核3		古墳	
	9・16号溝重機道下2列板より南側	核1		古墳	
	C区木道斜面部	核1		古墳	
	C区9号溝As-C混中	核1		古墳	
	C区攪乱斜面部トレンチ	核1		古墳	
	C区木道付近洪水層	核23		古墳	
	C区斜面部洪水層	核3		古墳	
下増田越渡遺跡	C区表採	核1			群埋文2003『下増田越渡遺跡』
	E区3面15溝	核・核片5	2	古墳	
小泉宮戸遺跡	埋没谷	93	あり	古代	吾妻町教委 2003『小泉宮戸遺跡』
徳丸仲田遺跡	J区河川跡	核・核片37	4	古墳	群埋文2003『徳丸仲田遺跡(2)』
東峰須川雷電遺跡	2号竪穴式住居	炭化核片29		古代	群埋文2005『東峰須川雷電遺跡』
	3号竪穴式住居	炭化核片41		古代	
	1号土坑	炭化核・核片7		古代	
江木下大日遺跡	40号住居	完形換算2個分		古代	群埋文2006『江木下大日遺跡』
	3号井戸	核・核片24+10		古代	
倉賀野下天神Ⅵ・下樋越Ⅲ遺跡	SK111	あり			高崎市教委2006『倉賀野駅北ⅠⅡⅢⅣⅤⅥ遺跡』
中郷恵久保遺跡	1号住居跡	炭化核2		古墳	群埋文2006『中郷恵久保遺跡』
砂町遺跡	7号溝	核		古墳	玉村町教委 2007『砂町遺跡(第1次～3次調査) 尾柄町Ⅲ遺跡 中之坊遺跡』
	1号溝	核		近・現代	

表2－3 群馬県内モモ出土遺跡3

遺跡名	地点名	部位・数量等	食痕	時代	文献
上郷岡原遺跡	Ⅲ区 1 面 2 号建物	核28・核片4		近世	群埋文2007『上郷岡原遺跡(1)：第4分冊自然科学分析編』
	Ⅲ区 2 面232号土坑	核片1		近世	
	Ⅲ区 1 面 3 号水田	核1		近世	
	Ⅲ区(39区) 10号トレンチ	核1		近世	
	Ⅲ区(49区) A-15グリッド	核1		近世	
	Ⅲ区(48区) Y-15グリッド	核1、核片3		近世	
	Ⅲ区(48区) Y-16グリッド	核1・核片1		近世	
	Ⅲ区(49区) B-13グリッド	核2、核片1		近世	
	Ⅲ区(49区) C-13グリッド	核片1		近世	
	Ⅲ区(49区) O-2グリッド	核片1		近世	
	Ⅲ区(49区) 2 面 1 号石組遺構	核2、核片4		近世	
吹屋三角遺跡	1 号河道	核4・核片2		古墳	群埋文2007『吹屋三角遺跡』
中郷田尻遺跡	Ⅲ区42号住居	炭化核1		古墳	群埋文2007『中郷田尻遺跡』
	Ⅲ区 6 号遺物集中	炭化核1		古墳	
	Ⅳ区12号住居	完形換算数個分		古墳	
	Ⅳ区29号住居	核1		古墳	
	Ⅳ区 5 号住居	炭化核片10		古墳	
	Ⅳ区NA-8	核片		古墳	
上ノ平 I 遺跡	1 号住居	炭化核3	2	古代	群埋文2008・2017『上ノ平 I 遺跡(1)・(2)』
	4 号住居跡	炭化核1	1	古代	
	8 号住居址	炭化核2	1	古代	
	9 号住居	炭化核1	1	古代	
	13号住居址	炭化核10	7	古代	
	22号住居	炭化核1		古代	
	23号住居(48号住居)	炭化核63+7	52	古代	
	30号住居	炭化核2	1	古代	
亀泉坂上遺跡	16号住居跡	6		古墳	群埋文2008『亀泉坂上遺跡』
堤沼上遺跡	16号住居跡	1		古代	群埋文2008『堤沼上遺跡』
往来遺跡	5 号畑	核片4		近世	玉村町教委2008『小泉大塚越遺跡(第2・3次調査・往来遺跡(第1・2次調査))』
下佐野長者屋敷遺跡	4 号土坑	果実・核28		中世	高崎市教委2009『下佐野長者屋敷遺跡』
富田大泉坊A遺跡	9 号溝	核1		古墳	群埋文2009『富田新井遺跡・富田大泉坊 B 遺跡・富田大泉坊 A 遺跡・富田宮田遺跡・富田宮下遺跡』
	28号溝Ⅷ層	核1		古墳	
	12号溝	核1		古墳	
	5 区47-F-9 グリッドⅤ層	核1		古墳	
	低地部	核1			
大道東遺跡	道路遺構 B セクション	炭化核・核片1+1		古代	群埋文2010『大道東遺跡(2)・(3)』
斉田中耕地遺跡	Ⅲ区 3 号井戸	核1		中世	群埋文2010『斉田中耕地遺跡』
	Ⅲ区 4 号井戸	核1		中世	
	Ⅲ区 6 号井戸	核2		中世	
	Ⅲ区 8 号井戸	核4		中世	
	Ⅲ区10号井戸	核4		中世	
	Ⅲ区11号井戸	核1		中世	
	Ⅲ区12号井戸	核8		中世	
	Ⅲ区11号溝	核8		中世	
	Ⅲ区 N33号溝	核2		中世	
	Ⅳ区22号溝	核1		古墳	
富田高石遺跡	27号住居	1+5		古墳	群埋文2010『富田高石遺跡』
万蔵寺廻遺跡	11号住居	炭化核1		古代	群埋文2011『阿久津遺跡・万蔵寺廻り遺跡・桑原田遺跡・十二廻り遺跡・中町遺跡・半田常法院遺跡』
	10号住居	炭化核2		古代	
綿貫伊勢遺跡	55号住居			古墳	群埋文2013『綿貫伊勢遺跡』
	63号住居			古代	
	1 区 2 号井戸			中世	
	2 区 1 号井戸	核		中世	
	2 区 1 号火葬跡	核		中世	
	2 区 7 号井戸	核		中世	
	3 区 1 号井戸			中世	
尾坂遺跡	13号住居	核片2		古代	群埋文2012『尾坂遺跡』
	14号住居	核片1		古代	
	1 号建物	核・核片25		近世	
	2 号道	核片2		近世	
	グリッド	核17		近世	
上新田中道東遺跡	Ⅱ N 区 4 面 8 号土坑	核3		古墳	群埋文2012『上新田中道東遺跡』
	Ⅲ N 区 4 面 1 号井	核1		古代	

表 2-4 群馬県内モモ出土遺跡 4



遺跡名	地点名	部位・数量等	食痕	時代	文献
東宮遺跡	1号建物	19		近世	群埋文2012『東宮遺跡(2)』
	2号建物	3		近世	
	4号建物	13	1	近世	
	5号建物	10		近世	
	7号建物	1		近世	
	8号建物	1	1	近世	
	2号屋敷	1		近世	
	馬屋	1		近世	
	4号溝	14	1	近世	
	8号溝	8		近世	
	1号土坑	1		近世	
	4号石垣	2		近世	
	5号畑	1		近世	
	グリッド	53	3	近世	
綿貫牛道遺跡	3号火葬跡	核1・核片1		中世	群埋文2012『綿貫牛道遺跡』
	1号火葬跡	核1		中世	
阿弥大寺本郷遺跡	3区1号井戸	核1・伴割3・核片2	1	古代	群埋文2013『阿弥大寺本郷遺跡』
下滝高井前遺跡	72号住居跡	核		古代	群埋文2014『下滝高井前遺跡』
	3区9号竪穴状遺構	核		近・現代	
東上之宮遺跡	1区8面2号住居	核2		古墳	群埋文2015『東上之宮遺跡』
	1区8面105号住居	核1		古墳	
	1区8面141号住居	核1		古墳	
	1区8面167号住居	核3		古墳	
	1区9面179号住居	核1		古墳	
	87号土坑	核2		古代	
町遺跡	1号建物	核39		近世	群埋文2015『町遺跡』
	グリッド	核24		近世	
	鍛冶関係遺構	核13		近世	

表2-5 群馬県内モモ出土遺跡5

遺構	番号	種類	残存率	長cm	幅cm	厚cm	特徴
1号住居	60012	モモ 炭化核	ほぼ完形	1.8	(1.7)	1.3	食痕あり、種子残
	60013	モモ 炭化核	1/2	(1.9)	(1.5)		
	60014	モモ 炭化核	1/2	(1.3)	(1.6)	(1.2)	食痕あり
4号住居	60016	モモ 炭化核	1/4	(2.0)			食痕あり
8号住居	60017	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.2	1.9	1.4	
	60018	モモ 炭化核	1/4	(1.6)	(1.2)	(1.2)	食痕あり、種子残
9号住居	60019	モモ 炭化核	2/3	1.7	(1.3)	(1.2)	食痕あり
13号住居	60020	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.3	(1.7)	1.3	食痕あり
	60021	モモ 炭化核	破片				小片
	60022	モモ 炭化核	1/2	(1.7)	(1.4)	(0.9)	食痕あり
	60023	モモ 炭化核		2.0	(1.5)	1.2	食痕あり、種子残
	60024	モモ 炭化核	1/4	(1.8)	(1.1)		
	60025	モモ 炭化核	1/2	(2.1)	(1.3)		
	60026	モモ 炭化核	3/4	(1.6)	(1.4)	(1.2)	食痕あり
	60027	モモ 炭化核	1/3	(2.2)	(1.4)		食痕あり
	60028	モモ 炭化核	1/2	(1.5)	(1.5)		食痕あり
22号住居	60029	モモ 炭化核	1/2	(1.7)	(1.3)		食痕あり
	60030	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.2	1.8	1.3	
23号住居	60031	モモ 炭化核	1/4	(1.3)	(1.3)	(0.8)	
	60032	モモ 炭化核		(2.0)	(1.6)	(1.3)	食痕あり
	60033	モモ 炭化核		2.4	1.7	(1.1)	食痕あり
	60034	モモ 炭化核	1/3	(2.1)	(1.7)		食痕あり
	60035	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.5	(1.6)	1.3	食痕あり
	60036	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.8	(1.7)	1.3	食痕あり
	60037	モモ 炭化核	ほぼ完形	1.8	(1.2)	1.1	食痕あり
	60038	モモ 炭化核	1/4	(1.7)			
	60039	モモ 炭化核	1/6	(1.4)	(1.3)		
	60040	モモ 炭化核	1/2	(2.1)	(1.7)		
	60041	モモ 炭化核	2/5	(2.4)	(1.7)		

表3-1 上ノ平1遺跡出土モモ核1

遺構	番号	種類	残存率	長cm	幅cm	厚cm	特徴
23号住居	60042	モモ 炭化核	1/2	(2.8)	(2.0)		
	60043	モモ 炭化核	1/2	(2.5)	(1.3)	(1.3)	食痕あり
	60044	モモ 炭化核	2/3	(1.9)	(1.7)	(1.1)	食痕あり
	60045	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.4	(1.6)	1.2	食痕あり
	60046	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.0	1.6		食痕あり
	60047	モモ 炭化核	4/5	2.4	(1.4)	1.3	食痕あり
	60048	モモ 炭化核	1/2	(1.9)		(1.3)	食痕あり
	60049	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.2	(1.6)	(1.3)	食痕あり
	60050	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.2	(1.5)	1.0	食痕あり
	60051	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.2	(1.5)	1.1	食痕あり
	60052	モモ 炭化核	1/2	(2.2)	(1.4)		食痕あり
	60053	モモ 炭化核	1/2	(2.1)	(1.8)	(1.2)	食痕あり
	60054	モモ 炭化核	ほぼ完形	(2.5)	(1.9)	1.5	食痕あり
	60055	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.5	(1.8)	1.3	食痕あり
	60056	モモ 炭化核	9/10	(2.2)	(1.6)	1.3	食痕あり
	60057	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.6	(1.7)	1.3	食痕あり
	60058	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.3	(1.4)	1.4	食痕あり
	60059	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.2	(1.4)	1.3	食痕あり
	60060	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.6	(1.6)	1.3	食痕あり
	60061	モモ 炭化核	1/4	(1.4)	(1.3)		食痕あり
	60062	モモ 炭化核	破片	(1.8)			食痕あり
	60063	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.7	(1.8)	1.6	食痕あり、種子残
	60064	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.2	(1.5)	1.3	食痕あり
	60065	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.4	(1.6)	1.3	食痕あり
	60066	モモ 炭化核	ほぼ完形	(2.1)	(1.7)	1.3	食痕あり
	60067	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.6	(1.7)	(1.2)	食痕あり
	60068	モモ 炭化核	ほぼ完形	(2.4)	(1.9)	(1.4)	食痕あり
	60069	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.4	(1.6)	1.3	食痕あり
	60070	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.8	(1.8)	1.3	食痕あり
	60071	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.4	(1.5)	1.2	食痕あり
	60072	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.6	(1.6)	(1.3)	食痕あり
	60073	モモ 炭化核	9/10	2.4	(1.6)	(1.3)	食痕あり
	60074	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.8	(1.6)	1.1	食痕あり
	60075	モモ 炭化核	ほぼ完形	(1.9)	(1.4)	1.3	食痕あり
	60076	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.0	(1.6)	1.3	食痕あり
	60077	モモ 炭化核	1/3	2.3	(1.2)	(1.2)	食痕あり
	60078	モモ 炭化核	1/2	(1.8)	(1.4)		
	60079	モモ 炭化核	ほぼ完形	1.9	(1.4)	1.2	食痕あり
	60080	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.0	(1.3)	1.1	食痕あり
	60081	モモ 炭化核	1/3	(2.0)	(1.3)		
	60083	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.5	(1.8)	(1.4)	食痕あり
	60084	モモ 炭化核	1/4	(1.7)	(1.2)	(1.1)	食痕あり
	60085	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.5	(1.6)	(1.1)	食痕あり
	60086	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.1	(1.6)	(1.3)	食痕あり
	60087	モモ 炭化核	3/4	(2.1)	(1.4)	(1.2)	食痕あり
	60088	モモ 炭化核	1/4	(1.9)	(1.3)		
	60089	モモ 炭化核	破片				
	60090	モモ 炭化核	破片				
(48号住居)	60094	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.3	(1.5)	1.4	食痕あり
	60095	モモ 炭化核	1/4	(2.3)	(1.3)	*	食痕あり
	60096	モモ 炭化核	3/4	2.2	(1.7)	1.2	食痕あり
	60097	モモ 炭化核	ほぼ完形	2.0	(1.5)	1.1	食痕あり
30号住居	60091	モモ 炭化核	1/2	(1.8)	(1.6)	*	種子残
	60092	モモ 炭化核	1/3	(2.0)	(1.3)	*	食痕あり

表3-2 上ノ平1遺跡出土モモ核2